

夫沙門釋子高上爲宗。

何處が高上だ大己に逢ふても禮せぬことか。人が來ても禮せぬことか。何處が高上だ平常の事が間違つて居るからいかぬ。高上は外より窺はれぬものだ。低くも見え高くも見え。人を畏れず蔑にせず。凡夫の如く道人の如く。無欲の如く大欲の如し。是れが本當の高上だ。横から見ても壁から見ても上から見ても下から見ても窺はれぬ。是れが高上だ。

既絶攀縁宜從淡薄。

内妄想を起し外諸縁に涉る之を攀縁と云ふだ。外に對して畏れ内に對してビクする煩惱の換へ言葉だ。淡薄が好い。本を讀み過ると煩惱が多い。老僧は讀書に傾く方ていかぬ。淡薄とは茶を廢して湯を飲むことにあらず一切淡薄でなければいかぬ。併し人情は淡薄ではいかぬ。道心には淡薄ではいかぬ。妄想煩惱には淡薄が好い。老僧は全體物が多過るわい。

割父母之恩愛。捨君臣之禮儀。

出家なるがゆゑに親の恩を捨て君の禮を捨てるぞ。

剃髮染衣持巾捧鉢。

手巾とは手拭のこと一丈二尺ありて片方では顔を拭き片方では手を拭く是非持たねばならぬものぢや。

履出塵之徑路。登入聖之階梯。

佛に入るさきはし。

潔白如霜。清淨如雪。龍神欽敬。魁魅歸降。

清淨潔白が好い。天龍八部諸鬼神が敬信し惡鬼の類が降參して來るぞ。

專心用意。報佛深恩。父母生身。方霑利益。

父母の生身自分の眞似せんとはあらず。老僧は父母に物を贈らぬ。黃龍が其の母に物を贈りたるとき其の母が三寶物は受けぬといふて衝き返した。黃龍重ねて是れは三寶物にあらず私有物ぢやと言ふたら其の母河を渡りて豈濡はざるものあらんやと言ふて受けなかつた。父母の産んで呉れた身を以て佛行を行ずれば父母の生きて



居る中に利益を及ぼしてやるぞ死を待つてなり、

豈許結託門徒追隨朋友。

信徒を拵へ朋友を拵へ。

事持筆硯馳聘文章。

詩を賦し文を作り。

區々名利役々趨塵。

區々たる名聞利養のために塵を趨ふ。

不思戒律破卻威儀。

さうなると戒律を持たず無慚無愧の語を吐き煙草をくらひ茶を立てるために羽織を着、牛肉屋に上るために合羽を纏ふ。

取一生之容易爲萬劫之艱辛。

一生そんな事をして今日を味すときは萬劫墮獄して六道輪廻を免れず全體僧侶は

三界を出離するが目的なるに萬劫墮獄の縁を作るとはナサケナイことだ、

若教如斯徒稱釋子。

無駄に名許り立派さうに釋子といふまでにて釋子の實は何處にあるぞ是れが洞祖の自分の誠めだ此の洞祖の誠めを守りて行けば好い御開山の用心集と併せ用ゐて一生の護身符となせよ。

○辞北堂書

伏聞諸佛出世皆從父母而受身。

どの佛でも釋迦文佛に至るまで父母をかりて身を受けた。

萬彙興生盡假天地而覆載。

世に出て來るものは天地によるぞ。

故非父母而不生無天地而不長。盡沾養育之恩俱受覆載之德。



天地父母の恩は免れぬ天地父母の恩を考へれば悪事は出来ぬ不養生は出来ぬ父母の艱難は容易でない其れを思へば姪欲に耽り名義を汚すやうな事は出来るものではない天地に對して味すべきものでない太陽に放參はない風の恩も浩大だ水の恩も浩大だ雨露の恩も浩大だ恩を考へれば懶惰放逸にして居られるものでない天地が運上取ると言ふたらどうするぞ是れを骨髓にしみて讀むときは之れにて澤山だ天地なくしては長ぜず父母なくしては生ぜず父母養育の恩天地覆載の恩を受くるから成人するぢや此の二恩を考へるときは澤山だ

嗟夫一切含識萬象形儀皆屬無常未離生滅

識あるもの動くもの天地さへ壊れるときがあるから皆無常だ

雖則乳哺情至養育恩深若把世賂供資終難報答作血食侍養安得久長

父母の恩は殊に深い世間の賂ものを以て孝行しては報恩とすることは出来ぬ牛肉呉れても百年の壽命は保たぬ

故孝經云雖日用三牲之養猶不孝也相牽沈沒永入輪回

食物だけでは孝行ではない

欲報罔極深恩莫若出家功德

三界出離解脱の法門に増したものはない

截生死之愛河越煩惱之苦海

生死は何より来るかといふに愛より欲を生じ欲より煩惱を生じ煩惱より愛憎を生じ愛憎より業を造り業によりて六道に輪廻す出家の功德は直に其根本を截り其の淵源を越ゆるぞ

報千生之父母答萬劫之慈親三有四恩無不報矣

三有は三界のこと四恩は國王の恩父母の恩衆生の恩三寶の恩自分の修行によりて何時でも三有四恩に報ずることが出来るぞ貴様達も知恩報恩が出来なければ僧侶となるより牛となつた方が好い牛は一つも無駄物はない骨は石鹼となり糞は肥料となるぞ牛となれば全身世界の用をなす坊主の志がなく願心なき奴は何の役にも



立たぬ牛にも及ばぬ。

故經曰。一子出家。九族生天。

是れは何經より出たか分らぬ南山の道宣より始つたと言ふ人もあるぢや。

捨今世之身命。誓不還家。將永劫之根塵。頓明般若。

無始以來幾度生き變り死に變りしたか知れぬ。其身其の心を以て頓に般若の大智見を明らかめ十二空無見無作の理を知つた。

伏惟。父母心開喜捨。意莫攀緣。

喜んで捨て、下さい心に引つ掛りを持たぬやうにして下さい。老僧も親が案ずるならんと思ひ斷念して呉れるやうに手紙を遣つたことがあつた。どうも親の事許り氣に掛りてならぬものぢや。洞祖は出家した以上は彼れ此れ思ふて下さるなと親に言ふて遣つた。

學淨飯之國王。効摩耶之聖后。

淨飯王及摩耶夫人が釋尊の出家を許された跡を真似て下さる。

他時異日。佛會相逢。

彌勒出世の時逢ひませう。

此日今時。且離別。

今日は先づお別れ申す。

良非遽違。甘旨蓋時不待人。

甘露の如き思召に違ふ譯でない彼れ此れして居れば成佛は出來ない。

故云。此身不向今生度。更向何時度。此身。

思ひ立つた時出家せざれば私もお前も成佛することは出來ぬ。私が出家すれば彌勒の前で逢はれませう。

伏冀尊懷。莫相寄憶。

私を思ふことは止めて下され。

頌二首



未了心源度數春。翻嗟浮世漫逡巡。幾人得道空門裏。獨我淹留。在世塵。謹具尺書辭眷愛。愿明大法報慈親。不須洒淚頻相憶。譬似當初無我身。

巖下白雲常作伴。峯前碧障以為鄰。

山に入れば白雲が伴侶をなし。峯が屏風の如く立ち並びて隣をなして居るぞ。

免于世上名與利。永別人間愛與憎。

其の境界の潔白なることは世間の名利と愛憎とを離れて居るぞ。

祖意直教言下曉。玄微須透句中真。

其の手段の向を言へば祖道は直に一言の下に悟られた玄玄微妙のところは句中の眞實を通り抜けねばならぬ。

合門親戚要相見。直待當來證果因。

一門のものが逢ひたいならば我が佛果に上りた時の因縁丁度佛が淨飯王及び摩耶

夫人のために説法した時を待つて下さい。證果因は證果の期と見れば好い。

○後寄北堂書

自離甘旨杖錫南遊。星霜已換於十秋。岐路俄經於萬里。

お側を離れてから十年経つて萬里の遠方に來た。

伏惟。孃子收心慕道。攝意皈空。休懷離別之情。莫作倚門之望。

孃子とは母のこと。世界は無常なることを観じて空門に皈し子に別るゝことはつらい杯と思ふたり。闕門に倚り掛りて飯りを待つて下さるな。

家中家事但且隨時轉有轉多。日增煩惱。

物が多くあればある程心配が多くなるぞ。

阿兄勤行孝順。須求氷裏之魚。小弟竭力奉承。亦泣霜中之笋。

兄弟が俱に孝行すること王祥が氷の下の鯉を取り。孟宗が霜の中笋を堀つたやうに



せよ。斯く兄弟二人とも俱に居て孝行すれば一人位出家しても好からう。  
夫人居世上。修己行孝以合天心。

俗人は孝行すれば天心に合ふぞ。

僧在空門。慕道參禪而報慈德。

慕道參禪が直に僧侶の孝行よ。

今則千山萬水。杳隔二途。

千山と萬水を隔て、居るから二途といふぞ。

一紙八行。聊伸寸志。

頌

不求名利。不求儒。愿樂空門。捨俗徒。

名利を求めず儒者にならうと思はぬ。只佛たらんことを願ふぞ。

煩惱盡。時愁火滅。恩情斷。處愛河枯。

煩惱は火に屬し、貪愛は水に屬す。煩惱が盡きたから煩惱によりて起る愁もなくなり、恩情が斷れたから貪愛の河水が枯れた。

六根戒定。香風引。一念無生慧力扶。

煩惱が盡きれば六根が六根定に入り、一念不生の時慧力が發して我が菩提を扶けるぞ。

爲報北堂。休悵望。譬如死了。譬如無。

北堂とは母のこと。今日は兎や角言ふものが出来たが昔からまあさうなつて居るぢや。千山萬水を隔てた萬里の遠きに居るとして心配して下さるな之を思ひ切ること死んだと思ふて下さい。又始めから生れぬものと思ふて下さい。さすれば思ひ切れぬことはあるまい。

○附嬢回書

侍者曰く此の書は老師聲振ひ、涙を流して御提唱なされた。其の譯は老師幼時母人の菩提寺に詣り、地獄極樂の圖を見て母人の説明を聞き、無常を觀じ無理に出家なされ。



其の後一旦歸國せられしに母人の嚴譴を蒙り又或る時書を母人に送りたるに其の返事は假名書きなれども漢文の此の書と大に相似たりとて當時を追懐し歔歔流涕して復た平生の海口を傾け一瀉千里の勢を以て滔々たるとは丸て別人の御提唱を拜聴するやうであつた余も亦竊に感ずるところあり心動き手暇ぎ手録することを得ざりしを以て特に本文のみを掲ぐることにしぬ看る人怪むこと勿れ

吾與汝夙有因緣。始結母子恩愛情分。自從懷孕。精神佛願。生男兒。胞胎月滿。性命絲懸。得遂愿心。如寶珠。惜糞穢。不嫌於臭惡。乳哺不倦。於辛勤。稍自成人。遂令習學。或暫逾時。不飯。便作倚門之望。來書堅要出家。父亡母老。兄薄弟寒。吾何依賴。子有拋棄之意。孃無捨子之心。一自汝往他方。日夜常洒悲淚。苦哉苦哉。今既誓不還鄉。即得從汝志。不敢望汝如王祥臥冰。丁蘭刻木。但愿汝如目蓮尊者。度我下脫沈淪。上登佛果。如其不然。

幽譴有在。切宜體悉。

明治三十二年十月十一日於駿州志太郡伊太村清隱山傳心寺隱寮講了





○正法隨聞記一則

百丈の話の入用は不味因果なり。因果を味まされぬ野狐身となつたは不味因果なり。不味因果なるゆゑ大修行底の人なり。不味因果なるゆゑ野狐身に墮したぞ。故に野狐身ながら野狐身を解脱して居るぞ。決して因果は味すことは出来ぬ。大修行底の人は不味因果不味因果と大修行底とは一寸もかはらぬぞ。斬猫は表面の話にて有無を切斷するが骨目だ。是れは借事問とて物を借りて佛法を聞くぢや。其れを知らねばならぬ有無を切斷し斷常二見を切斷す。是れ我見を切斷するなり。律僧が持戒に誇るは微細の我見ぞ。卑下も畢竟我見ぞ。微細の我見より一切の斷常二見が出るぞ。九十二種の外道は此の斷常二見より出づるぞ。斷常二見より微細の見出づるゆゑ九十二種となるぢや。兎に角斷常二見を斷ずるが斬猫話の根本だ。此の隨聞記は語が混雜して居るぞ。是れは講釋するためにお書なされたものでない。室内の話にて事理權實混雜して居るぞ。實は修行に熟練したものが見れば大邊の利益があるぢや。御開山や樊祖には鈍

いやうな處あり。又教相に合はぬ處があるぢや。茲も其の一端。講釋しても追つ付かぬ。  
**或時樊問て云く如何是不味因果底道理。師云く不動因果なり。**

因果不味は佛法の骨目ゆゑ問ふた。因果は天地の原則味ませる者でない。有るも無いもありはしない。父母の精液が因となり此の身が果となりて出來て居るではないか。只其の果を結ぶに遲速不常の差あるのみ。決して味ませるものでないぞ。故に因果は動すべきものでない。不味と不動と同じことだ。實は不味の不落のといふは遲了八刻云くなんとしてか脱落せん。師云く因果歴然なり。

脱落が氣に掛るぞ。脱落とは歴然なり。歴然が脱落なり。病氣の因縁があるから病氣す是れ歴然なり。其の中に動着せず居るが不動なり。脱落なり。脱落とは盜賊しても繩を逃がれて縛されずに居ることのやうに思ふは聞き違ひぞ。  
云くかくの如くならば因果を引き起すや。果因を引き起すや。



因が果を引き起すや果が因を引き起すや因果宛轉して居るぞ是れが十二因縁の根本だ連絡して居るぞ親が因となり子が出來て其子が又親となるぢや因果宛轉所縁縁増上縁てくるくまはりだ。

師云く總てかくの如くならばかの南泉の猫兒を斬るがごとき大衆既に道ひ得ず便ち猫兒を斬却しおはりぬ。後に趙州頭に草鞋を戴きて出たりし亦一段の儀式なり。

是から公案の話となるぞ一段の儀式と云ふて好い。三世諸佛の儀式は問答小參商量よ趙州の有無情識を離れた働きは一段の儀式だ。

亦云く若し南泉なりせば即ち云べし。道ひ得たりとも便ち斬却せん。道ひ得ずとも便ち斬却せん。何人か猫兒をあらそう。何人か猫兒を救ふと。大衆に代て云ん。既に道ひ得ず和尚猫兒を斬却せよと。

何と言ふても病だ。住着すれば病だ。透脱も病だ。一刀一段も斬らねばならぬ。一路涅槃も斬らねばならぬ。有無の二見も明白裏の一段も斬らねばならぬ。維摩の默然も病だ。斬らねばならぬ。腹に病あれば食つても食はなくても病だ。妄想を除くも病だ。真如を取るも病だ。分別妄想名聞利養の病あるものは何を行つても病となるぞ其れを斬るぢや。

亦大衆に代て云ん。和尚只一刀兩段を知て一刀一段を知らずと。

茲が御開山の御見識あるぞ。一刀兩段を知らぬ一段の處も斬らねばならぬ。有無超越を好いと思ふ病も斬らねばならぬ。

樊曰如何是一刀一段。師云く猫兒是。

猫兒といふ名を持つて居てはいかぬ。假りの名に迷ふてはいかぬ。

亦云く。大衆不對の時我れ南泉ならば大衆既に道不得と



云て便ち猫兒を放下してまじ。

道不得ならば猫兒を放下す是れ御開山の活手段ぞ放下してまじとは放下してしま  
うたらう位の意。

古人の云く大用現前して規則を存せずと。

大用現前猫を斬るも斬らぬも草鞋を戴くも規則はない規則を立つれば公案でも何  
でもない死物だ。定盤星を認めてはいかぬ規則悟り公案悟りは屁にもならぬ。大用現  
前規則はない。趙州或る時は有。或る時は無。或る時は庭前栢樹子。此方に規則はない。此  
方に病ひがない。是てなければ佛法でない。

亦云く今の斬猫は是便ち佛法の大用現前なり。

大用現前だ猫を斬つたから殺生戒を犯した杯と言ふな。

或は一轉語なり若一轉語にあらずば山河大地妙淨明心  
と云ふべからず。

何と言ふとも一轉語だ。法界唯識山河大地妙淨明心と現成して居るぢや。若斬猫なけ

れば妙淨明心と謂ふことは出来ぬ。

亦即心是佛とも云べからず。

斬猫は殺生杯と言ふな。佛行佛心だ。若し斬猫なければ即心是佛と謂ふことも出来ぬ。

便ち此一轉語の言下にて猫兒即佛身と見よ。亦此詞を聽  
て學人も頓に悟入すべし。亦云く此斬猫兒即是佛行なり。  
喚て何とか云べき。云く喚て斬猫と云べし。契云く是れ罪  
相なりや否や。云く罪相なり。

ズハット富士の絶頂に上りて砂走りから下りて昔飯となる。此の眼より見れば斬猫は  
罪よ。向上の話は蓋のことを防がねばならぬ。斬猫は罪相よ。斬猫を罪ならぬと思ふて  
無暗に斬るを誡めらるゝぞ。放下とか一轉語とかすれば好いが徒に斬猫すれば罪に  
なると向下に下つた。

契曰くなにとしてか脱落せん。



斬猫の罪相を何として解脱せん。

曰く別々無見なり。

別々だそんな罪相や解脱といふ見がある譯でない。見なきなりといふ意だ。

曰く別解脱戒とはかくの如を云か。云く然り。

別解脱戒は菩薩大戒を謂ふぞ之れに説あり。小乗戒は十戒中一戒を破れば其の他の九戒もともに破れるが菩薩大戒はさうでない。一戒にても持てば其の功德によりて解脱が出来るぢや。故に別解脱戒と謂ふぞ。別解脱戒は大乗戒よ。一戒一戒に解脱が出来るから別解脱戒と謂ふぢや。是れ斬猫は罪相なれども解脱の上になると別な話ゆえに見なきなりと言はねばならぬ。殺生戒を破りても不瞋恚戒か不貪欲戒か一戒を持てば解脱を得ると謂ふ意だらうよ。殺生戒を破りても外の一戒を持てば解脱は出来ませうかといふなり。室内の話ゆえ親しき話が出来ると。

亦云くたゞしかくの如きの料簡たとひ好事なりとも無らんにはしかじ。

併しそんな事は仕ない方が好い。佛見法見を破するため木佛を焼かずとも好い。大般若で尻をふかずとも好い。有無を斬らんとて斬猫するにも及ぶまい。

附  
載  
了



明治四十一年二月廿一日印刷  
明治四十一年三月十二日發行

永平初祖學道用心集提耳錄與附

定價金五拾錢

發行人兼  
編輯人

東京市芝區露月町十八番地

今村延雄

印刷人

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

太田音次郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀英舍

發行所

東京市芝區露月町十八番地

鴻盟社

振替口座九七七九  
電話新橋三千廿七







居大 名現 順爲 黃境 黃境 大各 居大 藏荒  
 士內 家代 敬尾 洋野 洋野 家宗 士內 天木

維 禪 禪 印 日 通 禪 仙  
 摩 學 宗 度 本 俗 學 術  
 經 學 史 支 佛 佛 大 學  
 講 評 史 那 教 教 綱 意  
 話 論 要 佛 史 要 要 術

全 全 全 全 全 全 全  
 一 一 一 一 一 一 一  
 冊 冊 冊 冊 冊 冊 冊

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 金金 金金 金金 金金 金金 金金 金金  
 八五 貳十 十壹 十壹 十壹 二五 六三  
 十 五 二 二 五 十  
 錢錢 錢錢 錢圓 錢圓 錢錢 錢錢 錢錢

本社發行圖書目錄を要せらるゝ御方は郵券二錢御送附被下度候

發行所

東京市芝區露月町十八番地

鴻盟社

振替口座 九七九  
 電話新橋 三千廿七



324
71

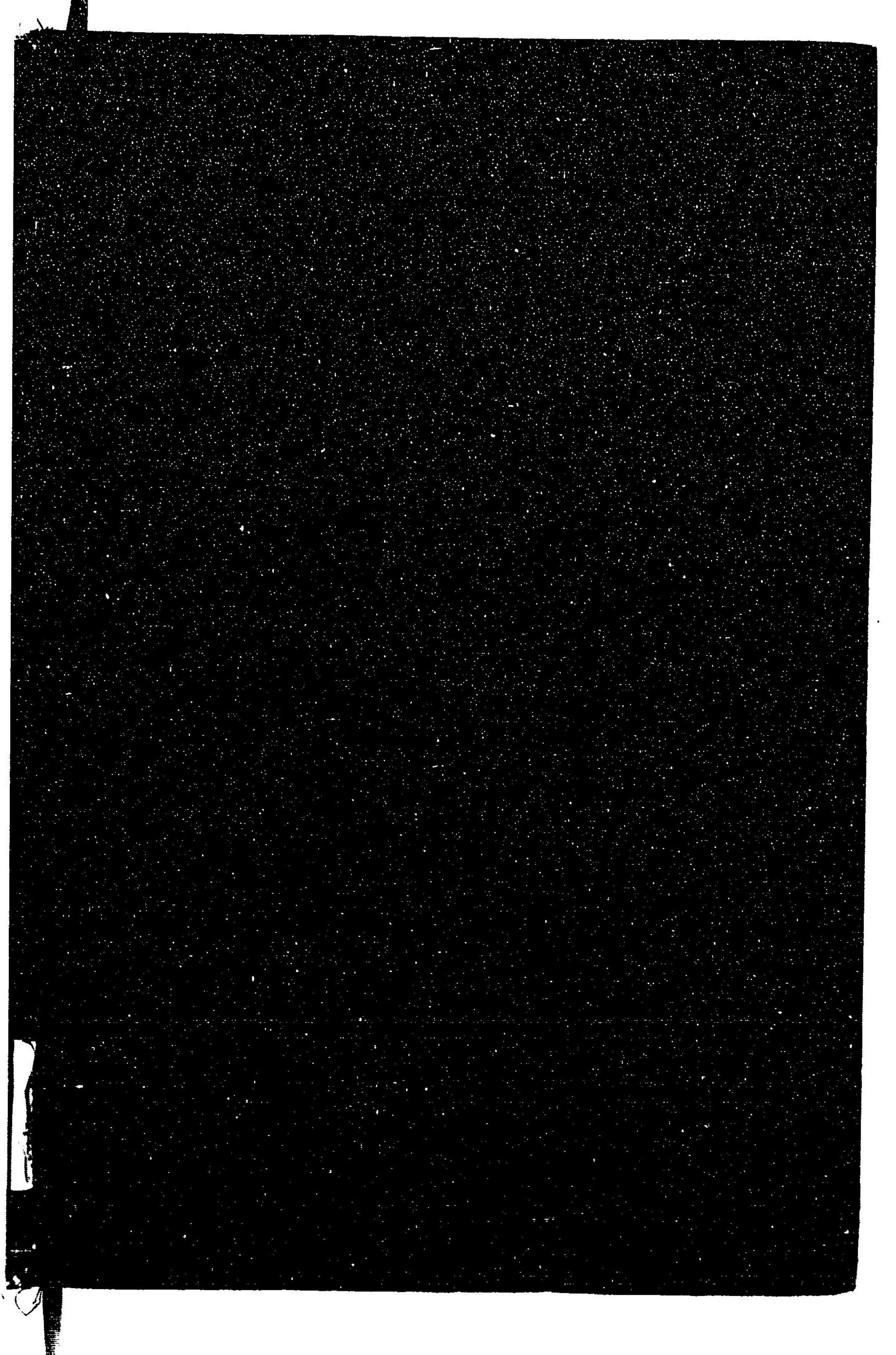






324  
71







324  
71

019382-000-8

324-71

学道用心集提耳録

今村 延雄 / 編

M41.3

ABG-0082





